

## 2018 年の「国慶日」を祝う 台北市の記念式典

10月10日は中華民国建国記念日の「国慶日」として台湾では祝日とされている。街の至る所に中華民国国旗の「青天白日満地紅旗」が掲げられ、毎年、総統府や各自治体で記念式典が執り行われる。台北市もまた、10日、市政府前の市民広場にて式典を開催した。

時々小雨が降り、曇り空のひろがる午前6時30分。市民広場にはすでに数多くの市民が集い、行列を作っていた。行列は数量限定の記念品であるリュックサックの引換券を手に入れるため、午前2時頃には用意された3,000個分を上回る人々が列をなしていたという。特設ステージ周りにもすでに人だかりができていた。顔に「青天白日満地紅旗」のペインティングをした若い女性や同旗がデザインされたTシャツを着た夫婦らが高揚した様子で式典の開始を待っていた。来場者には式典の運営スタッフから一枚の紙が配られた。片面は「青天白日満地紅旗」、もう片面は白地に「中華民国107年國慶升旗暨慶祝活動」の文字などが記載されており、式典中に司会者の指示に従って上に掲げるためのものであった。午前7時、式典が始まった。まず国旗

掲揚である。中華民国国歌と国旗歌がそれぞれ斉唱された。朝が早いせいか、或いは普段歌う習慣があまりないからか、人の多さに見合わない歌声の小ささであった。その後、柯文哲台北市長がステージに立った。しかし挨拶は1分にも満たない程度で、市民への感謝と「市民とともに努力し台北市を更によくしていく」という抽象的な市政への決意にとどまった。祝賀式典らしからぬ極めて淡白な挨拶であった。

式典には「台北監督連戦」のメンバー6人全員も駆けつけた。台北監督連戦は、宋楚瑜主席率いる親民党と無所属の台北市議会議員及び次期統一地方選挙の出馬予定者で構成される親・柯文哲のグループである。彼らが一堂に会し、柯市長とともにステージ上で並んでいる様子は、国慶日の式典というよりも、11月の統一地方選挙に向けた「決起集会」のようであった。奇しくも市民が式典中に掲げた紙の片面は白色を基調としており、青色(中国国民党)でも緑色(民主進歩党)でもない白色をイメージカラーとする柯市長のために準備されたものではと勘ぐってしまった。

式典が終了すると人々は台北市政府や台北 101 をバックに「青天白日滿地紅旗」とともにあちこちで記念撮影をしていた。「中華民國」の国慶日を祝う「台湾」の人々。10月10日は今も台湾社会に内包された問題とその複雑さを象徴する祝日だろう。



国慶日の式典に集う人々



ステージに立つ柯文哲台北市長と「台北監督連戦」のメンバーら

